

平成30年度

堺学シリーズ講演会

入場無料

定員 600名

申込不要

堺の歴史、文化、産業など堺の魅力について、どなたでも興味深く学べる講演会です！
ぜひご聴講ください！

※この講演会は連続講演会ではありません。各回、個別にご参加いただけます。

各日 14:45～16:05 (80分間)

講演概要は裏面へ

第1回

10月18日(木)

堺の経済発展の歴史と経済効果

講師

宮本 勝浩氏

(大阪府立大学 名誉教授
公益財団法人堺都市政策研究所 顧問)

第2回

11月 8日(木)

蔵のとびらを開いてみれば
一堺鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家を未来へー

講師

藪田 貫氏

(兵庫県立歴史博物館 館長
関西大学 名誉教授)

第3回

11月15日(木)

デザインの視点から街の活性化を考える

講師

間宮 吉彦氏

(大阪芸術大学 教授
九州大学 非常勤講師)

第4回

11月22日(木)

堺市の生物多様性とその保全

講師

平井 規央氏

(大阪府立大学大学院
生命環境科学研究科 准教授)

第5回

12月 6日(木)

井原西鶴と堺

講師

森田 雅也氏

(関西学院大学文学部 教授)

場 所：大阪府立大学 中百舌鳥キャンパス Uホール白鷺

(〒599-8531 堺市中区学園町1-1)

・大阪メトロ御堂筋線「なかもず」駅下車、5番出口すぐ左折、
徒歩20分

・JR阪和線「三国ヶ丘」駅下車、バス15分「府立大学前」
下車

・南海高野線「白鷺」駅下車、徒歩15分

※公共交通機関をご利用ください。

(車でお越しになった場合、学内には入れません)

定 員：600名 (入場無料・申込不要)

※手話通訳・要約筆記による情報保障が必要な方は、各講演会2週間前までに(公財)堺都市政策研究所
まで、氏名(ふりがな)・連絡先・参加希望回・必要な情報保障(手話通訳/要約筆記)をお申し出ください。



<問合せ先>

公益財団法人 堺都市政策研究所	大阪府立大学上方文化研究センター内 「堺学シリーズ講演会」係
住 所：堺市北区百舌鳥赤畑町1-3-1 堺市三国ヶ丘庁舎4階	住 所：堺市中区学園町1-1
TEL：072-242-8680	TEL：072-252-1161 (代)内線4387
FAX：072-242-8689	E-mail：sakaigaku@ao.osakafu-u.ac.jp
E-mail：info@sakaiupi.or.jp	(事務員が不定期の出勤の為、お問合せは メールでお願いします。)
URL http://www.sakaiupi.or.jp/	

主催：(公財)堺都市政策研究所・大阪府立大学上方文化研究センター

講演概要



堺の経済発展の歴史と経済効果 (10月18日(木)開催)

「ものの始まりなんでも堺」と昔から言われています。堺は、昔から独創的な品物、アイデアの発祥の地でした。鉄砲、自転車、タバコ包丁、線香など多くの品物は堺でつくられて、日本中で使われました。そして、現在でも堺の品物、アイデアは日本のみならず、世界で使われています。このような「モノづくり」の堺が、これからも発展していくための戦略と地元での経済効果についてお話をします。



蔵のとびらを開いてみれば — 堺鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家を未来へ — (11月8日(木)開催)

堺は近江国友と並んで鉄砲(和銃)の産地として知られていますが、江戸時代を通じた鉄砲生産に関わった家が今も残っています。堺空襲をまぬがれて奇跡のように残った井上関右衛門家の蔵のとびらを開けて出てきた資料群の魅力を紹介します。

江戸時代前期に開業し、明治中期まで鉄砲鍛冶として全国の大名家から注文を受けるとともに、幕末には大砲制作にも進出した鉄砲鍛冶の存在は、歴史都市堺のモノ作りを象徴しています。



デザインの視点から街の活性化を考える (11月15日(木)開催)

堺は西から瀬戸内海、南からは太平洋が大阪湾で繋がり、ちょうど中央に位置する交通の要衝にあります。近畿地方の外港として、様々なものが交流し独自の文化を発展させてきました。内外の文化がここを通り流通したことで、日本を代表する文化や産業が育てられた堺には、たくさんの魅力があります。お店をデザインし街が活性化してきた事例を元に、堺の地で活かす取り組みをデザインの視点からお話します。



堺市の生物多様性とその保全 (11月22日(木)開催)

堺市内には海、河川、丘陵地、森林、農地、ため池、古墳、公園などさまざまな環境があり、5,000種近い生き物が確認されています。一般にはあまり知られていませんが、カスミサンショウウオ、カワバタモロコなどの絶滅危惧種、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルなどの発光性のホタル類、フクロウ、オオタカなどの猛禽類など貴重な生き物が各所で見られます。一方で、外来種の侵入が深刻で、セアカゴケグモ、クビアカツヤカミキリ、アルゼンチンアリ、アライグマ、オオキンケイギクなどが次々に見つかるとともに、在来の生態系に悪影響を与えていると考えられています。

本講演ではまず、堺市でかつて見られた生き物、現在絶滅の危機に瀕している生き物について、鳥類、魚類、両生類、昆虫類などの動物を中心に紹介します。また、最近侵入した外来生物について、その特徴や問題点についてお話します。最後に希少種の保全に向けた取り組みや外来種の駆除についても紹介します。



井原西鶴と堺 (12月6日(木)開催)

井原西鶴は『世間胸算用』で「泉州の堺は、朝夕身の上大事にかけ、胸算用に油断なく…」と書くように堺という地に特別な思い入れを持っていたようです。一般的に浮世草子作家として知られている西鶴ですが、当時の上方の人々にとっては、俳諧師西鶴というイメージも強かったと思われます。西鶴は若くして俳諧を学び、いつの間にか大坂天満宮連歌所の長であり、談林俳諧の祖であった西山宗因に師事し、21歳ですでに俳諧の師匠となり、大坂談林俳諧の雄として人々に知られるようになりました。特に住吉神社では矢数俳諧を興行し、一人で一昼夜 23,500 句の句を詠んでしまいます。これには堺の人々もさぞ驚かされたことでしょう。ところが師の西山宗因の死とともに、西鶴は俳壇そのものから離れ、突如、浮世草子の嚆矢『好色一代男』を刊行し、全国的に名声を得ることとなります。その後は矢継ぎ早に『好色五人女』、『西鶴諸国ばなし』、『武道伝来記』、『日本永代蔵』等多くの浮世草子を刊行し、現在は外国からも17世紀に世界に名を残した小説家として国際的に高い評価を得ています。それらの浮世草子に堺を舞台とした話がしばしば登場します。西鶴は堺の人々の世態人情をどのように描いたのでしょうか。西鶴は堺という地をどのように見ていたのでしょうか。ゆっくりとお話したいと思います。

